

認定こども園せんだい幼稚園 園長 田原 慎也

うまくいかないことを体験する

小学校中学年になった娘を見ながら、自分が小学生だった時ってどんなだったかなあと思い返すことがよくあります。「おいおい、今は便利になったけど、昔はこんなじゃなくてさ…」と語りだすとただの「めんどくさいおじさん」扱いされるのは承知ですが、それでも昔を思い出せば思い出すほど言いたくなるのがおじさんの頭の中から山ほどあふれてくるわけです。

小学生の時の友達との待ち合わせはまさに「必死」なものでした。30年ほど前の話にはなりますが、当時は携帯電話そのものを持っている人も見たことがない、電話と言えば固定電話もしくは公衆電話という時代です。「今度の土曜日、みんなで遊ぼう!」「どこ行く?」「〇〇公園でサッカーしよう!」「じゃあ、2時からね」と、友達と遊ぶ約束をみんなで交わしていざ当日。

6人で約束したはずなのに誰もいない。時計なんか持ち合わせてはいませんが、そんなのは慣れたもので近くにある時計が置いてあるお店を思い浮かべて「この場所だったらあのお店が近いな」と自転車を漕いで時間を確認しに行くと、たしかに2時をとくに過ぎている。「あれ、たしかに土曜日の2時って言ってたよな…」。「もしかして土曜日じゃなくて日曜日だったっけ…」。「2時じゃない…?」ひやっとする感覚を覚えつつ、頭の中でお友達顔と一緒に先日交わした会話の情景を必死に思い出そうとするわけです。

時間が経つにつれて少しずつ冷静になりながら「5人もいないってことは絶対自分が何かを間違っているだろうな…」、頭の中に思い浮かべたAくんはたしかに土曜日と言っている、CくんDくんとは2時って確認したはず…、などと記憶の断片を繋ぎ合わせて、「あ、この公園じゃなかった!」と気づいてあわてて別の公園に自転車を漕いで向かう…。

なんてことが日常茶飯事でした。
(出会えないことも多々ありましたが…。)

そんなことを思い返しながら、おじさんは語り始めるわけです。『おいおい、昔の「待ち合わせ」っていうのはね、長い時間軸の中の一瞬に、壮大な地球の中の1点に、10歳にもなっていない人間たちが口約束だけで集うっていうことなんだよ、奇跡そのものを感じるかもしれないけど、それが約束なんだよ。契りなんだよ!』後半はつばとか飛ばしながら話しているかもしれませんが、それが当たり前だった時代を経験したことが、今の自分にも糧になっている部分もたくさんあるんだろうなと感じるのです。

鍵っ子だった私は家の鍵を学校に持って行くのを忘れてしまったときには、近所の駄菓子屋のおばちゃんに「すみません、家の鍵を忘れたから電話貸してください」と電話を借り、番号を暗記している母の職場先に電話をかけ、後日、「この前は電話ありがとうございました」と親から渡された10円を握りしめお礼に行くということが生活の中の行動様式の1つでした。というより、そうしないと寒空の下で2~3時間凍えて待たないといけなくて、日々を安全に生き抜くスキルとして自分には必要なものだったのです。

買い物するにも何の言葉も発しないで成り立ってしまう、困ったら親同士で連絡してもらえばすぐに解決できる、それはもちろん便利な側面はありますが、子どもたち自身が「困った」という場面を直視し、自分たちの力で何とかしようとすることや、自分が困らないために工夫することも必要な経験だと思います。

あの子がいじわるしてくる、ぜんぜん言うことを聞いてくれない、植えたはずの球根がいつの間にか全部抜かれている…など、幼稚園の生活の中でも「困った」はたくさんあります。『子どもたちだけで解決できない「困った」』と『子どもたちにも向き合ってほしい「困った」』とを保育者が見極めつつ、子どもたちにも「困った」をどう乗り越えるかを経験し、考えたり、話し合ったりしてほしいと思っています。ソーシャルスキルは不便やうまくいかない、アナログな人と人とのやり取りの中でこそ育っていくんだと思っています。